美濃家墨形帳

上

3587

米沢市上杉文庫館蔵書中

藤本文庫

昭和17.6.10

寿濃乃家部屋形縁の上乃巻

[illegible]

[illegible]

新勅撰集

春歌上

[illegible]　　正三位家隆

いく度か月の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○天保入古部[illegible]形縁の上の巻

きてぞうきかさねをやどすとはたづねて
よるまくとおもくやとしいてるもいとやとしたはぐ

春の歌とて　後京極摂政太政大臣

雪消ぬ山の谷ゆかすかに梅香いまもまがるうぐひすぞふく
なべてくるしき雪のあけぼのはみぐるまもなし
はるやこのふるさとにしき雪のあけぼのはみぐるまもなし
しらまさる海風とはいはじ梅ぞよ白みの浦風ぞ
やまぶきの花ぞ雪かと　白川院宮女房
梅ぐもりかすみしむとろかせうしみくとあらぬ雪のよの月
いまぬ夜の月やあらぬの雪ぬの雪ぬの雪ぬの雪ぬ　初白れ

ぬ　三の白ぎぼうしの雪よりはひ
あくるとはぐ春ぶ月も梅ぐもりかすみしてみるやとけて
たれぐろもそれぞれ　ぬぐろもそれぞれ
かすみしむ雪ぬ雪ぬ雪ぬ雪ぬ雪ぬ
雪みくむくしみるしみるしみるしみるしみるしみる
にの白きぼうしぬ雪ぬ雪ぬ雪ぬ雪ぬ
まれぐろもそれぞれ　梅ぐもりかすみしぬ
むくのぐくみもあくぬ雪ぬ雪ぬ雪ぬ雪ぬ
常盤院近衛殿ふるさとを春ひとをまたる山花を
いつくとよ　講ぎくとよ　拾遺

面影ふ事のすぐるを
紅葉ぐ中ゝし。　上句ふ笹のふしやふ
てりそめるをいひ〳〵ゆく末のさびふうを
ものり。

武蔵国秩父

霞ふるゝ
あの白雲ふ見へるの山乃――中ふハるゝあ〳〵あらかゝれたるを人
ゝ
ゝ
ゝ

春亭下

建暦二年春詩歌を会せしに花々ゝ小山居春曙

摂津前司定家

なほ雪ふるしまのあくるしも雪とふる山ざとの曙の空

ゆくすゑ遠しと下白雲初めてやましし。小倉の山荘ものこし。嵐山

乃蔭ふかきたにのうぐひすなきそめて。初白嵐ふきそこなはれし。樵夫の

きこゆるこゑとく。二三の白嵐ふきそこなはれし樵夫の雪とふ

きばすがたもこゑ嵐ふるとふるまの陰なるをいふかの嵐も

ちろしふぶいはれそぐひかすり。嵐をかすめも形もまぼろし。見ふ

見えぬ物をまるをちぼ樵よりそよくいとめる雪ふるもまる

しはいはれん。笑冲そふぐく弱をあぎたれどもいとめ

ちゝはそ平ふ山樵ヶとりみと。万年ふるもんること。ゆきの

へれてとまいひく。山居のさまもしそとくるも時代をこそふ

へぶ所ゝ。ゆきのこ絶ゝ戸のあくるふ樵のある山ものこ

ゝふよるんこそ。ゆきうへ公分ハ嵐の嵐も雪とふる山ヶ代ぐさ

たゝ代ぶたとひ万年ふるもあるこそとるとそも山居の樵ヶ

ふるこもや。牲弱をゆくぐ一ゆの氣も必ゝ曙ふ山ぶ

回じてとれるぐれバ歌のこゝろうぐ。又すぐふ名もたる

ゆくあるれうへ。嵐ゆしいとはまくそ代ゆゆるゆく

ふ万ゝこほしふ嵐ゝあるゝふ。ゆくしそちゆし。

又十七こゝろざしなる小女下遠日　後京極摂政

ふる雪のあけやらぬ夜をうちしぐれぬべきなみだの
かなしさ　いざこゝ小女郎よ八ヘ山すがらや伏見の里もあきはく
るをし　東京歌枕をくしみてそこふかき世へをこそ
名をも代をも八雲のあけぼのをばゆるすかぎりとこそ
めべしとぞすなる。

関路花

あふ坂の関ふきもてこしかぜぬれぬるなみを波
二の白八河の波の岩のぬらしぬるかしこゝといてれ泪を
とり。三位の白をかたらんとれどぬきぬえをしあれぞ。

海ゝあふ坂の関もとゝまるかぜとどまるなみとうとき。

霧しらん

西行法師

ふるさとは霧のもとゝ波岩ぬらしてゝまゝとあづらふ山川のみ
二三の白。相模ぐ者をし。

参議雅経

春の来ぬ月もまたるゝ小夜ふかぬめぜしまふ
春のうらゝふるまゝにうつろひぬ花ふるかぜ
みるまゝにまち

花の雪

花ゆゑ白ふ雪ひらぬ人のうらゝ中ぐ山ぬ八ヘ見しまの中風

○ゝ白ふ白ふ白ふ

後京極摂政

花さそふあらしの庭の雪ならぬ
降るは古りにし春の白雲

白雲の春のあけぼのかすみ
たる山の端ばかりぞ残りける

春の夜の月の光のあかねさす
雲ぞ山の端にかかり

ゆくすゑの春は神ぞ引とめてしばるべうや恨の手向し

つれなくも去るゆくゑ恨をいひすて流て玉藻の神をたゝ

ぼるみづのうと源よこの事をとゝめり。

夏二首

建保六年百首合ふ夏歌　雜部

ほとゝぎすおくやゝ五月のゆゝしげ二葉ゝてゝ明る夜ゝ然

五月の玉は万年ふ明るまが神詠をあかもが五月の玉

ふまじ〳〵ぬまゝ「ほとゝぎすいくぬまゝ」ほとゝぎすの詠を五月の

五月雨ぬくまでふ。　ほとゝぎすはなるまゝ一つをふ明るまの

みをゝ。まあるゆるふよめり。

後法性寺入道前実白百首歌百首歌ふ五月雨

俊成卿

ふるさとゝめていくふかりぬ佐藤川　八十像もまゝぬ五月雨の

初白雲に二の白まりぬ佐の孫く。　ほの白ふかまるまて一つふ

まれるまゝ。いくふかりぬ小白ふけ合ふろし。

百首歌ふ

法京極摂政

ほとゝぎす法今いくよをゝ鳴るまゝ杵の五月のあまし明つゝろ

中納言ふ五月雨ゝ歌ふ作られふ紅葉

八道二ふ釈王そう助

ふ[illegible]のまひしのまひしくふ釈風ちうゝゆく芳つ[illegible]

紅ゆゑぐ[illegible]

歌　ゝ　ら　尺

如釈法師

明あるうゝ[illegible]月釈の初うしもゝ[illegible]時の釈衣

[illegible]ふ[illegible]みゝ[illegible]ふ[illegible]せゝ。　釈の光いゝ。　英沖[illegible]

白を何れ用うるゝ[illegible]やあゝんゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]し係る

ゝゝ[illegible]ふ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

いゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

六月稜

後京極摂政

早ゝ[illegible]釈のかゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

二の白ゝ[illegible]ゝ[illegible]月日のかゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

宮[illegible]元年女院入内屏風　家隆

風そゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

三ゝの白ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]月釈。　英沖[illegible]初白をあゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

ゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

は風ふそゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

ゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

○[illegible]

秋哥上

題しらず　　源具親卿

[illegible]

名にぐしたし。初句又は秋とよまるるもめづらしの意。

入道二品親王十首哥ふ　山路月

　　家隆

松の戸をおし明ぐるみ山風ふかしらぬ月をまちいでぬるかな

上句初句ぐたし。「天の戸をおし明ぐるの月を見ばこそ」

和歌所哥合ふ海辺秋月　小倉殿

あかつきの風ふきひの浦ふかぬ波のよせくる秋のよの月

秋哥中　　[illegible]

すまのあまもすまぬほの光をかくす風もあぐる月たかきまで

下句ふるい風光月もたかきまでの意をかくすぬせ

年毎の月よりも新の月なり　浦風も吹くなり

し月の新さへ岸のそばの木の葉のあらそふもあはれ

なるつゆ毎にもよりもあり。

秋部下

秋の夕

信濃具定母　後成二女　同人し

うき雲はさもあれ秋の来るかの嶺の月ふかあさぢふの月新

絶えぬるし　祖めぐりしし　上句を世をもあくがれの

あぐらくるる命にてきてもちぬ分とつ

とあり。　下句ふかさ　深の嶺乃神ふかし

さきさきに先分みて月きさみ雲あれば嶺をよもい

ひたる所ふ月新とひて嶺をさきせしこと。

建保二年秋分なりしふ　雅経卿

月を秋の月のよりもいとくしむ月をのこやとまつ

和歌所の月の光をまつ宿ふ新よりいとくしむ

業冲下句をはあはつ月しかきしづたるもや

さいへるも海ふたやさらに祖そのもの新古今雅経ふ西

行ふ世ふあるべやもさらにもとしてあるやさらに

世ふ見ぬ世ふ見ぬ人ともやもしぬ世はとまれたもをつるし海新

[illegible]

はるかぜのかぶりあれば[illegible]

[illegible]

[illegible]

面影やつゞら折なる坂の姿のかゝるあまぎだちのへとさいへるふぜい
小船をすなどる事をこゝろ小海をこるもせられぬこゝろふかし侯

秋雨

行きゝの山つゝまるるもあはれなるかたちなるの山のさまあ
初霜ふるこゝろ小笠也

玉ゝ雨ちりけるか　　雅隆つ

秋の田くゝ形ちの海をこゝろ小ぎりこゝろ小ぎりこゝろ小ぎり
雲ふかうの海くゝ九月晦日の雲の時人をよめるこゝろ小ぎれこゝ
ぎれこゝろ小入られこゝろ小ぎれこゝろ小ぎれこゝろ小ぎれこゝ
百ゝ雨ふる中小　　武ゝ円秋也

秋ゝ雨ふる秋人をたゞぬぬ松の声をいくゝよもぎまふ
ぬぎこゝろし　初白ゝ人ゝ雨ふる秋ゝ雨ふる秋ゝ雨ふる
雄ゝ雨ふる秋ゝ雨ふる秋ゝ雨ふる秋ゝ雨ふる秋ゝ雨ふる
ゝ雨ふる秋ゝ雨ふる秋ゝ雨ふる秋ゝ雨ふる秋ゝ雨ふる
とひ世ぎこゝろ小ゝ雨ふる秋ゝ雨ふる秋ゝ雨ふる秋ゝ雨ふる
秋ゝ雨ふる秋ゝ雨ふる秋ゝ雨ふる秋ゝ雨ふる秋ゝ雨ふる

秋入ゝ雨ふる　　雅隆つ

秋ゝ雨ふる秋ゝ雨ふる秋ゝ雨ふる秋ゝ雨ふる秋ゝ雨ふる
ぬぎこゝろし　秋ゝ雨ふる秋ゝ雨ふる秋ゝ雨ふる秋ゝ雨ふる
ゝ雨ふる秋ゝ雨ふる秋ゝ雨ふる秋ゝ雨ふる秋ゝ雨ふる

二三の白ゆき今はくるそ後うしてハ下白ゆきあさぼらけ
ねうぶ風とふくるとなれ雪ちりぬ

冬十首

建保五年三合冬山雪　中納言隆房

かさねのもとやいづこゆふやみの雪おもふ方なきこの夕暮
絶ぬべくうしろめたし　かきくもる暮ふかうさえ
くもるそ暮をいづくもかくへくうえもなき男のかき暮ふかく雪の
雪ふるそ雪ふるそ雪ふるくゆれとも　雪ふかく雪ふるそ雪ふるそ雪ふるそ

ばやあるふかうふるそ雪の白ゆきふるそ雪ふるそ雪ふるそ雪

いそぐはおもの河のくもゐ　年よりるのはまつのいそぎと
てまもの海のあをいなもとれるとも　初句ほのぼのかすみ
そもやくもゐ　三句しらの

羇旅哥

旅のこころを

あづまへくだりやこしなれの雲ゆくもそのあらしふ
彩杉をまふも山旅とらふ　雲をしいれり　行も
そぐをぬるは今うくる雲の雲ふ行もあくなりて　そぐ

雜部

まれに海じきふ　秋の夕又ふ　まもうやこ　あの月の
で雲ふ　ふるをそのあるじ　あるじ
まり　秋の月のふ　しの白へかまぐも　初二句へかたぐる
あふたぐよはしふ　力

恋歌一

定家

おもふ　定家
おもふ　定家
おもふ　定家

[illegible]

[illegible]

[illegible]

てハ杖ぶつまし[illegible]
[illegible]
むこ[illegible]

哀傷二

建保五年閏月庚申ふ久哀　定家朝臣

こひしきあまの[illegible]
いまさらあくがるるもあはれなるかな
べきなのおくるるまて哀も死ぬ[illegible]

よんづよき[illegible]
つ[illegible]
初日張白二日ふ[illegible]
[illegible]
[illegible]
年へたまぶ人の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

雅経朝臣

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

初二句八[illegible]

[illegible]

雨中[illegible]

建保六年三合ふ恋　定家

[illegible]

[illegible]

時[illegible]

[illegible]

[illegible]

大蔵つ有家

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

上句紅よくとのひたるも。　此の句俗ふれをもせるも。

下句のとをづゝのふあもしろし。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

恋部五

[illegible]

[illegible]

○[illegible]

撰歌かの人民多為ゆきもれしこと井をぼしさんつるもあるのそこ
初二句は夜をきのへしてぬきだ[illegible]
よれり。此の句は特にせぬこころにこそ[illegible]
[illegible]。歌の様の作なり。初句はよく表こしこと。
同じ[illegible]
歌しらず　雅経卿
ふるきさまをぬるおもの枕のよひくふあひも絶ぬ[illegible]
二の句は[illegible]
[illegible]
此句はぬるに早ぬのめくせめれど絶ぬ[illegible]

思ふたくもきぬるいとのこそあり。一説のこそらつくふあ[illegible]
[illegible]
きりぎりすぬるなかふ[illegible]
建保六年百首合歌　こそ　雅経
たつのこと[illegible]
名にぐたし河めぐ[illegible]
初句は[illegible]
ふあ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
家隆卿

○[illegible]

[illegible]

二の句又とんぢ[illegible]

乃下句はそこなひあしでさぐいつともうぬとあるを初ふようて

つまをみてそこなひとりとしいつあるよりの。

みをちゝ衆を合ふ　　奥秋[illegible]

後の世ぞ[illegible]

結句初の[illegible]

めくみもなくてすぎこそ[illegible]

多きをみるこゝはしら[illegible]

あしぶ後の世を[illegible]

世をぶてる知ずして。　下句をば世みく笑うらぶしてを死められ

ぶをもみぶ後の世の[illegible]

もうもめる中をぶすして後世の[illegible]

[illegible]

みをくしてしてをあるよりしをもいぶてたぐ

ふをあるをのをもいつれも一をの[illegible]

[illegible]

世をぶもあるをみじくをの結をぶをもぶ[illegible]

[illegible]

[illegible]

○[illegible]

百そぢ[illegible]ふ[illegible]遊不遇恋　　法京極摂政

うつろひしかのふるさとをたづねてもこずゑぞ[illegible]ふく

まさるれるこころぞ[illegible]の事ぞとてつづくふ[illegible]

かくこそかつづ

雜部一

旅　　[illegible]　　[illegible]法師

あづまのかたにまかりけるこころをよめる

奥定つ母

[illegible]

[illegible]

[illegible]

二三の白ぬやとおぼしきものひとつ。ぬるるをやとひふいるものもあり。

ちるを。　三月白ゝを張たるつゞけてくゝりたるべし。

晩速憶

西行とやまざくらさきそめぬやまもとの霞の隙ゆ洩るこの夕の雪

春たちぬとつゝみかねたる梅の花ぬるるこの夕の雪

ふ。春たちぬやぬるるまもあるまでに。下白ゝ。春の雪ゝ方八首。

おもかげの雪ゝ方。月梅ゝ。

夜の明るをいつ。

建保四年百首歌合ふ　順徳院御製

降ちるゝいづれをとはあらねどもなほ春雪の梅ぞ先ん

いづれをかいづれをとはあらねどもなほ春雪の梅ぞ先ん

ちるぞ思へば。ちる時の白ゝ方ぬ。ふるとも白ゝ方ぬ。

つもるとも白ゝ方ぬ。ふるとも白ゝ方ぬ。

春雪

ふるとしもなくは白雪ふるぎりの花ちるかとみるまでに

二三の白ゝちるかとみるまでに。一そのさゝ。ぎりつもる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]べし。

春二月、下

湘院折改百首之内小花　皇太后宮権大夫俊実女

さき初めしはつ花ゆゑ思ひつる花しみすれぬ山桜かな

色ぞ[illegible]。　上句、仮の事にも[illegible]ぬ[illegible]

[illegible]世を思へばの[illegible]句、[illegible]れぬ[illegible]

[illegible]べし。[illegible]

[illegible]所の[illegible]時　前中納言定[illegible]

[illegible]

二の句、[illegible]

[illegible]山[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]べし。　さてかくまで

[illegible]

[illegible]べし。

建保二年詠百首　河上花

○[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

定家卿

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

春のそる乃ふの

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

嵯峨八景の和歌あれども、詠白秋八月まちまうけ
なほ、二の白みつきあはせるもの。

秋部上

初秋

藤原為家

風の吉ふくみつり秋の来てまだ見ぬ人の袖ぞ涼しき

先ごたし。初白、むしのとこの白へきて、又二の白くもか
うはなる。なほ、むしの風の音。秋八月ふけ立ち初れ
いまぞ見ぬ世をそむる秋のもつぐ風ふかずしむるなり。

いそぐ深くむせり。

大納言為家

みな百重ふ合ふ

涼風ふすずしくまびく夜の野ぶしすゞ涼ふ秋ふ来ぬ

三位の白、すゑふの親ふ初め。

定家

名にしおはゞ立ちる年ふ

秋ぞ深ふ吹あへぬ風ふ分るそ露の玉ゝ家

見すぎぬ人ぞ乃、下白ふ立るそ露の花ふ初秋ふよ

せる。秋ぞ深ふ吹あへぬ風ふ秋ぞ深ふ風ふかぬるもあ

へぬ年ふ。

前大僧正

寂蓮法師

今よりの秋の夜風やいうちむけとぶらかぐらみぐるかな

原家清

きくしはてゝうたゝねあるゝ言のなくしひふもなをあはりかの秋乃久美

建暦二年松尾社歌合小袖秋風

なのゝ玉のこゝろしもあらばいづくよりぐくよりぐ数そよ義乃うそ風

えぐたし。袖めぐくてし。いづくふ事月をつくそ。やや今

年しはるもあるふたゝび義のよ風ふ源の数ちくそ。あらぐし

やくそ。　下白八年おくふ秋の世しまのやもるあ

建保三年おくそ言合小野路秋　従二位家隆

あはるみるさもやどりしも露ふ風の吹くしくふ秋の志のいろ

宮内省図書寮

志くしまびとのみよ白露くひかりて。吹くしくふ秋言のみて

ぶるえるもかりさそはけ三の白はやとじ。あづやちくぬやくなれ

ぞと。風乃吹くしくふ秋の秋とはやしいかなの風ふなるそやどそ

そくそもなくもしもやしくふ秋あ。　一首のそこ八篠ふを風のふ

さ秋乃ふそくそもやどるもしくふ秋ぬくしまり。やどるもの志くふ秋ぬハ

枯ふゆくしびきく篠ふよくくしきたるあ。

同二年秋十首言合小秋風　雅経卿

今よりもの義乃下ふもいるくまびい秋ぞの秋風ぞふく

ひふハ世間者昭ゲ云。たるふ秋義の下第色づく今よりや独ある

人のつよぐふ志ろ色をなりふてよるなるハ。萩ハ義を侵るしといる。

[illegible]

秋歌

[illegible]めこが袖ふる山ゑのもみぢ　家隆卿

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　定家卿

[illegible]

[illegible]

[illegible]

はし書に秋なつかしと云て秋の歌ばかりをこそ詠ずるなれ

野の秋ばかりをこそ詠ずるなれ

もとめとぶらもかぎりあるべし。　歌のことばに萩の露をとる所

小萩のうへの露ふうつるまで秋のむすびつゆもあきらかなり。

野ゆきすがら露をきぶかくとあるべし。

みな白露の合ふ　後鳥羽院御製

日数さへ見べき松の秋風ゆゑ分てこゑもかはる

秋の夜の月をもとめてあかすべし。

秋の夜の月をもとめて

藤原定家卿

かきもとの萩の露をはらはずとつゆ秋をまつ虫の音をたづねつゝ

野の草の秋をしらでなきのみつゝ人のおりかゆゑかの野。　かきもとむ後の夜こそ月はなけれ今ぞしるかな

落ぬべきすゑにかゝれるしらつゆのこぼれもとまるかぎりなきかな

落ぬべきつゆ。　秋の夜のあけぬるまゝに萩のうへの露をとりあつめて

もとめてもとめてもとめつゝ又つひにもとめあはぬ秋のこゝろを

さへ思ひやりてこゝろをあきらめ。　四の句ふうくもぶりなれ詠。

秋部中

西宮内大臣入道前右大臣家歌合に秋夢

家隆卿

秋百夜ねぬる枕のうきまくらたゆたふ夢のたまくしげ川

藤原清輔朝臣

人しれぬゆくへもとまらぬ秋風にさそはれいづる月のまよひぢ

さそはれて月の袖にあかしつる百夜の秋の夢の通ひぢ

正治百首歌合に

後京極摂政

音信やあはれとぞ思ふあきかぜの月入る氷ふる郷のそら

秋夢下

みな百首歌合に

二條院讃岐

よもすがらふもとのしほやまいるまの波のよるの夢にぬれぬる

よもすがらふかぬ夢にうつりもとまりぬ夢とも見ぬとこの秋

るるもそひぬとも思ひ　三の白みもじいとぎぬ夜ふかしてぬれ

ひとりのふるさとにやまぶきとまくらとまくらとべきるもの

ひとりいとまのもるさふ秋さへ衣をうつしてふるもれぬ袖ハ

秋ふうつまじきものやうふかぬ夢のやうふかぬ夢の間乃まくら

よもすがらかりたのふかぬ夢のやうふかぬ夢の間乃まくら

夢百そこのしきるついくふ　順徳院御製

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大井川[illegible]

[illegible]

[illegible]

色くろくなるなり。　初句やとは疑ひなき二の句なり切字。　四乃句。指さしひらきたる者の意。　こなみは波なり。まつは松の根入あらはるる方をいふ。者ふかくなるの者ふかくなること二方へ用ひらるる。

古今風あみバはうつ者のたちやうにやとし。

実説

かの〳〵ものさびたる三づれさまやのそまつなる一軒ばかりの長屋や八百人なるこゝかの大坂三位がしづのをだまきよりとをもひをもひ移びてよる秋なるみそしそはは。義の筆ふふまるふまるもさ秋ぜんとうたるこゝろ。そのうへは秋を風ふこゝ物つゝしまれあるゝ者の者ふはよるとしを秋ぜ秋白風をさまをやしあるかぜまれバ義の筆ふまるなり。

秋白の句をとれるなり。

ろ三位がうすれやふるとあるとゝいまかひとゝ見るこゝ。

寿莫法師

庵の中のふるふつゝ子をとゝ人なあつまるつべきく行ぞやとゝ風なかるのごとくこゝろをとゝ人なあとゝ秋をとゝ海ゝ秋。庵のこゝ者のもゝ風ふるゝふふくふるゝら風べき秋のこゝ風をゝゝ。今をさまゝふぬこゝろべゝ秋のこゝ風をゝゝ。

寿門杉のひゝ秋ゝ秋ゝとゝあるゝとつゝあるとゝれバあゝふゝ人

○天は入来沙を杉法の上の者

釈教二首

化城喩品

八條院高倉

いそぎたちてこしかたのみちをもとめくらすはるかなるみやこの里

新古今詞書にはなしし。

哀歌一

三首中哀

俊成卿女

さいかちじふゆびのそでをそでにいそぐおもひのかずかさねばは

はるかにさいかちをしかべし。それぞふいとそでこそ

くさをふはあしびはやすびめぐし。　一そこの名

ハおもひよりふさあびくいそぐしそ死ぶがめのきをそこの

思ひのあぐりそぐよそ人ふまらじとふるん。　なまそ仏の燈の

まもるかたちもあれどめのきをひふ死たるんのなかんん。

又おもひのひをたかふるとて犬の腸ふる仏の燈の名殘

みをもう稀ふる。

哀二首二

不動哀

俊成卿女

思ひ初の髪すぢも外ふさこもあきんのかしふ中ばろしもが前
さてもたちまさんとつぐきこゆと道さかしの孫く。海がろし、
この茅巻茅ふ孫くゆきし幻術のさちゆと。さてつ孫を
美幻ゆしねいへで髪ふ孫あり。

道物法秘主あ丞そ髪ふ言燈恋

家隆卿

たづねてやくづるよりふすづ寄せ志のづの浦のあまのもしお火
神白たづね行てとそ。　あづ思ひの燈のあづび
てもまぎてこうしづきふつて。思づの浦のあるの燈やく
くづを思ひ何ふやぎしかして思づとそ行て見づやさく。

思づの浦といつまを志ひづとふとそ。　よそ秋思づ思ひ
みをとを思ひそもいとそ。その志のあるふ思のしるとぐく。

正治百首歌なまるる　　定家卿

久こうこのあまそる神のゆるのづるかまそいく世を恋てこそ世
祝ぬぐ。　たづひて思ふ神の料ぐのるとふ入こ
みあるてる神ふあるとそやづくし。

恋部三

歌　　小侍従

[illegible]

初句[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

帝国図書館蔵

法華経院下野

おく山の日蔵のうづゝみぞ思ふ人りみづきもそめうん

みづゝふるのぎのうづゝの孫もみり。

恋二首に

歌しらず

さぎくさぐく恋をするうつの山うつの変れ文をたてねば

さぐいまぐさぐみくかくぐそらしぐ紅過ぐ学ぶたぐ。

他のうくあしぐるふれいづぐ。るハうやうみもつひうる

俤をしさくうくかく歌く恋をするうづきくる紅もり。

歌くみくゝ切くる須みさあくびさて中一白紅いるおびく歌

といみるもかもしかぎのぬ恋やうくべきまれまくバ文ところぬ

思ひすぐのうつ乃山うつのまくよたどる桃おどぐよすくし。

かくいみ二の白二花ふ人きもぬ思ひすうづのくもあり。たどる

ふ恋をみるしうつまるくしうもきどるおくうつの山俤

みるもしきくおくくしきくみくくくくよと或人いう。

世保二年内大臣家歌合より恋

ちくきぬすれ後撰おひ孫よつまひしかくくを恋ふくうく

ちくきぬすふ恋ふ白ちくのらひるもく。　二花の白ハ。

○天徳乃内裏歌合の上の恋

おくしてをひしてこゝろぶとひぬふうぐこそ。　通ひし八。
橋の孫し。　かゝるみぐ。
あしの屋小菅やすゞしあやたゝ屋もよ屋八ふ作
一そこの孰ゆうしうきぬとやゝまるいひぐ屋こ。

歌一ら民　　土佐門院御製

源ちる秋ふあきくぐのそふ秋屋ふくやしこそぐこそこ
三の白竹・こそぐ作ずるこそよこうこそ。

恵子本一ふ

やどうもせ　しかるほの義の義だのり消ぐ神のいろふこひ
ぬんぐ屋し。　初二百ぶひし孫ひふる屋ん

主。　おなぐ屋ぐ屋消ぐ屋ぐこゝ屋ふやこそぐふ合のあれる
ゑ。　神のあこしうこ屋の義こゝ屋ふつひこそ。
このあ屋ぐこしうこ屋の義こゝ屋ふこそ。
笑こゝ屋ふこし本の原れこのぐこし八これ考こじこそのこ和
孫ぐ家こゝ八孫こしこそふあきこそ。　あこの八年の
人こゝ屋孫ぐこあ考ぐこ今八家孫ふあぬれば孫をそ
孫こも考こじこいこゝ屋ふこ孫ぐ孫いあこ八むこし年こあきし。
ろあぐこゝ屋ふぐこゝ屋ぐこ。

恋部五

恨恋

家隆卿

[illegible]

後鳥羽院御製

[illegible]

雜部中

雜部下

歌之部

順徳院御製

もゝしきのやへむぐらさすかりねのあるじはたれとしるらむ

たのもしきかりの孫乃初音かな

俊成卿女

ゆくすえのこゝろまつ虫ことのはの秋のゆふぐれ

名ぞ惜しき　初名ぐたし

恋歌　中納言あつまの

こゝのばせ思ひ人まちがをのまつかぜ　下句

あらまほしこのばせ思ひ秋のゆふぐれ

露ふかしこのばせ思ひ秋のゆふぐれ

ら歌　上二句又結句よしとてよくよく

羇旅部

旅宿打聞

完結

ちはやぶる神の御代にかけまくもかしこきかぜの旅ねかな

名ぞ惜しき　初めてきこえし　家八松風ふかやまされて

えんぎもの　ものぐるほしき　ものぐるほしき

車の旅ぶ　ものくるしき　ものくるしき

人ぞ　ものくるしき　ものくるしき　下句ものくるしきといひて

ものゆかしきとて下句ものくるしきをとるべきこと

○天徳乃古歌と打聞の上の巻　○卅一

賀歌

[illegible]永元年八月十五夜、鳥羽殿小御所にて[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

後京極摂政

いにしへ[illegible]人のすふらんし月の影[illegible]

[illegible]

[illegible]

乃[illegible]の中[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

9112
1
07

て、海の内つあるところをみなうつし、もし漢文ハ四海をもつて
内方とみなしたるとみてしかるべし。

建仁三年、和方百ゐ、九十賀をいとなみける時、をうの孫の
枝をおりて、後ハ奏し給ふる。　後撰集

ひさかたのあまのハしたてかぐ夫れ八百代の後代のためなり
神京採物をハ、ひさかたハうづのあらたへ夫ハ是をうゑつゝ
乃清枝そ。　下白ハ、枝の孫をもてをもしるし、この年の枝を
てゝ、ぬぐ、れをとゝ、ゆるをもつて、こゝ、この年の枝れたるなり。
なりやとゝ、ゆるをもつて、ぬぐ、うる人をいふ。